形でしか実現されず、従つて直に農奴制の一般的形成をもたらすものではない。とはいえ在家の進化に伴なつて成立した二次的な（上層の）在家は、従来の名主とは異り、隷属的な生産者と共に、支配層と戦う可能性をも有つたものであるとされる。

律令制以来の畠地の特殊性に着目され、その点から所論を展開されたこと、また在家の進化の過程を具体的に跡付け農奴制形成史の中に位置付けされたこと等、本稿には注目すべき見解が少からず見出される。唯氏は年貢担当者としての容認といつた庄園領主側の対応については述べられたが、在家を直接把握していた名主は、在家の進化にどのように対処していつたのであろうか。勿論氏は東国の国人層の動きについて「東国における惣領制の解体過程」（史学誌六一ノ三）の中で触れておられるが、この点を今後明かにして頂きたいと思う。井ケ田良治氏が「南九州における南北朝内乱の性格」（日本史研究十七号）で提出された伝統的領主（名主）と地頭との対立は、重要な問題点の一つであるが、九州の「在家」の問題を考える際には此様な複雑な支配関係と関連付ける事が、必要でなかろうか。さて最後に氏が単なる見通しとして出されたが看却し得ないのは、新しい在家としての二次的名主の成立を、上級領主に対する戦線の拡大とされた点である。氏はその実証を「荘園解体期における農民層の分解と農民闘争の形態」（歴史評論四四―四五）で畿内について試みられた処であり、また氏の所論に対する賛否は暫くおくが、辺境の在家の進化が、土一揆を説明する理論に簡単に接合されている様である。より必要なのは、辺境は辺境としての一貫した見通しをうちたてることではなかろうか。

以上筆に任せて、蕪雑な紹介と非礼な感想を連ねたが、各論者が久しく追求されたテーマについて、極めて精力的に、且真摯に、考察を深められた事は、筆者の深い敬意を払う処であつて、その表現の言葉を知らない。今後の中世史研究にあたり、研究者が必ず出発点としなければならぬ必携書を見出した喜びが、この非礼な蕪辞を記させたものとして、ひたすらに御海容をお願いしたい。然し佐藤氏の得宗、渡辺氏の均等名、安田氏の庄官的領主制、永原氏の在家という極め付の配列を見る時、これらの先学には一層夫々の問題を深め、中世史の大きな潮流の中に統合されんことを望むと共に、新しい分析視角の発見がひろく中世史家によつてなされる事こそ、今後の中世史を発展せしめる一つの方途であると考える。今一つの方法としては、律令体制の崩壊との関連の中で中世史を究明する事である。本書中の多くの論者が異口同音に述べられる「人から土地へ」「人身的賦課」などの概念が、内包を必ずしも明確にされぬままに用いられているという不満はある。然し中世後期の研究が近世農村史との緊密な連絡によつて、著しく推進されている事と思い合せ、律令体制の崩壊と関連付けて中世史を研究しようとする方向は、当然の事乍ら、喜ぶべき現象である。（A5三四八頁、五八〇円、吉川弘文館）

―上横手雅敬―

G・トムソン著 池田薫訳 ギリシヤ古代社会研究 ――先史時代のエーゲ海――

このような書物の紹介は私には荷が重すぎる。本書はその内容において余りに多岐であり豊富であつて知識をこえるばかりでなく、従来の研究とは別な新しい立場（マルキシズ

ム）に立つ甚だ野心的な大著であるからであり、しかもすでに村川堅太郎氏（思想）や呉茂一氏（西洋古典学研究）によつて十分に批評紹介されているからである。しかしながら今、その飜訳が完成したのを機会に、も一度屋上に屋をかさねる紹介があつてよい書物であると思われる。

本書は五部に分かれていて、第一部、血縁関係では、多くの原始民族の社会や親族の名称をつかつて、ギリシァ古代社会にもトーテミズムと集団結婚的性格があり、イロクァ族にみられたように部族から国家が生成したことが、証明されている。トムソンもいうようにモルガンの理論がギリシァ古代社会――いうまでもないが本書の場合は古代ギリシァのなかでの古代、すなわち先史時代である――にも適用されるのである。第二部、母権制では、ギリシァ古代社会は母権社会であつたことを論断しようとして、伝説的な――もつともトムソンでは実在であるが――諸民族である、カリア人・レレゲス人、ペラスゴイ、ミニュアイばかりでなく、ミノア人、ハッティ人にも母権制を認め、デメテル・アテネ・アルテミスなどのギリシァの女神にエーゲ世界の母権制の反映をみるのであつて、バッハオーフェンの説を再興している。訳本の上巻はこれで終るが、ここではギリシァ人の古代社会も普遍的な原始社会であり、人類進化の一環として示されている。

下巻は第三部、共産主義から始まる。いつも問題にされるホメロスの句（イリアス・一二、四二一―三）からして、古代では土地は共有であつた。クレルキアや植民の場合において土地を籤によつて分配したこと、籤の神としてのモイライは原始共産主義の経済的社会的機能の象徴であるのである。第四部、ミュケナイ時代では、ミュケナイ王朝の系譜、アカイア人やその重要民族の系譜、イオニア人についてのべ、この時代が私有財産に基礎をおき、父権制をとる社会の生成期であることを、文化の衝突をあらわす諸現象から証明している。第五部、ホメロスは、詩の芸術論、叙事詩の祭式的起源、ホメロスの考古学と言語学、ホメリダイの諸章で、甚だ言語学的であるが、彼はホメロスの詩は一人のものではなく、多くの世襲的詩人群の作品であるとしている。

以上は目次を並べたような大綱を示したにすぎないが、本書の大体の構成はこれからも察せられよう。しかしこの大綱のほかに、実に詳かな具体的な記述が特色である。ギリシァ社会史の大問題である共産制、氏族制度、母権制、叙事詩の起源、ホメロスといつた諸問題とそれに附加的な多くの問題が片つぱしからといつてもよい程に明確に解答されている。ギリシァ文学の専門家である著者は、その豊富で該博な言語学と神話伝説の知識を目まぐるしいばかりに使つて、さつそうと論を進めてゆく。私にはついてゆけない所が多くある。しかしこの書についての評価の大体は、やはり彼の学問的な立場にあるであろう。これまでの歴史家が史料が不足として、未決定のまま残した所、議論が停頓している所において、トムソンは一定の法則をもつて史料の不足を克服して解決しているからである。その法則の当否は別として、この一種の決断こそ彼の世界観にもとづくものであるからである。しかし法則といつてもそれは決して抽象的な理論ではなく、またマルクスやレーニンの隻句を引用するようなことは一度もない。この点に、すなわちその安易ならぬ自身の努力には敬服せざるをえないであろう。

このような立場であるから多少の強引さは目につくし、幾つかの誤りも指摘されよう。たとえば十章ミュケナイの章においても、クノッソス破壊後は、後の遺物の中に異民族の侵入によることを暗示するものはない。この侵入者はミノア文明と同化していたと想像せざるをえない（下・八七頁）とあるが、それが異民族の侵入なることは考古学上からもとくに証明されている。彼が引用しているペンドルベリーの書物を一見しても明かである。またミニュアイ人はミノア化されたペラスゴイだとするが（上、一八四頁、下、九〇頁）この場合（ペラスゴイはふれないでも）においてはミニュアイ人とミニュアス土器とはも少し区別されねばならない。ミニュアス土器はミノア文化と関係が全くないから。またミュケイ時代のギリシァとエジプトとを関係づけるために、エジプトの第十八王朝の墓壁画から推測してミュケナイの商人達が十五世紀にケミスに植民しなかつたという理由はない（下、九六頁）というが、私はその可能性は考えるけれども、トムソンの結論は早急すぎると思う。同じようにイオからしてイオニア人とエジプトとの関係を証明するのも、少し強引なようである。その他、全体についても古代史に対して神話や民族学を適用する場合の限界は、なかなか私には定めにくい。

しかしともあれ、これまでには本書ほど、ギリシァ古代社会について包括的根本的にしかも割切つて書かれた研究はない。多くの史料の自由な駆使と努力は並ならぬものである。それ故に、たとえ立場を異にするとも、トムソンが、提出した解決点、解決の過程の中には多くの暗示とヒントを汲みとらざるをえない。そしてわれわれも自らその一々を再考し吟味してゆくところに、多大の収穫がえられると思う。最後にトムソンの意気と意図とを明示する序文をあげておかねばならない。そこで彼は「すでに過去幾年にもわたつて凋落の一途を辿り」「人類の進歩を促す勢力との接触を失つて」、「未来から逃避する隠家」となり「かいなき努力を続ける少数のひま人の道楽となつている」ギリシァ研究の「価値を回復」するのは、マルクス主義による外はない。マルクス主義こそ「歴史上最も多事であつたこの四世紀間によつて豊富にされたヒューマニズム」であると。

訳文については明確で申分はない。ただ所所にでてくる「ヘラス文明」は我国では「ヘラディック文明」の方が、使われているように思う。この大訳を完成された訳者に敬意を表わしたい。（上巻六百五十円、下巻九百円、岩波書店）

——村田数之亮——

執筆者紹介

杉井　六郎　京都大学大学院学生
曾我部静雄　東北大学教授
池田　源太　奈良学芸大学教授
川喜多二郎　大阪市立大学助教授
勝藤　猛　京都大学大学院学生
上横手雅敬　京都大学大学院特別研究生
村田数之亮　大阪大学教授